

松の間

一、花香をほとけにまいらせ候事は。

答、花瓶にさしちらしても供養すべし。香はかならずたくべし。便あしくばなくとも。

——法然上人百四十五箇条問答——

生活には必ず意味があります。仏壇に花と灯明をお供えするの
も、花は慈悲を、灯明は知恵を表わしています。

知恵とは、ありのままに物事が見えること、つまり、正しいもの
の見方、考え方ができることです。慈悲とは、他人の幸せが素
直によるこへ、他人の苦しみを自分の苦しみとして感じることで
できる心です。

仏壇に灯明や花をお供えすることは、この知恵と慈悲を寄せあ
って生きることが幸せへの道であることを教えています。お花が
私たちの方向けられているのは、その教えが私たちの方向け
られていることを示すためであるのです。

新しい花をきらさず香をたき、灯明をともし、日々新しい気
持で仏壇に手を合わせましょう。

総本山 永観堂 禅林寺

ある人が法然上人にたずねます。「花や香をほとけにあげますことは必要でしょうか。」

それに対する法然上人の答。「花は花瓶にさして飾っても供養なさい。香はかならずたきなさい。都合わるくてできない時は仕方ありませんが」



一衆生のうえにも
往生せぬことあらば、
ゆめゆめ阿弥陀仏は、
正覚なりたもうべからず

——安心決定鈔——

凶 槃 涅 仏

「君たち、仏さまと神さまのちがいつて、どう思う？」

「……………」

「神さまはね、人間がなることは絶対にてきないの。ところがね、仏さまは、人間がなることができなのだよ。仏さまは、人間の中心で一番聡明で尊とく、すばらしい方なんだ」

「じゃ、ボクもなれるのかなア？」

「そうだとも。そのために一生懸命努力してこらん」

「何を、どう努力すればいいの？ 勉強？」
「もちろん勉強も大事だ。でもね、それにも増して大事なのは、心の持ちようです。自分のことを考える前に、他人のことを考えてあげられる——そのような心を持ってほしいな。『あなたからどうぞ』と心から言えるようになれば、君は仏さまになれるんだ」

「そうかー（眼が輝く）」



三十六歌仙図

(問) 智者の念仏と愚者の念仏と、いずれも差別なしや
(答) 仏の本願にもとづかば、すこしの差別もなし

——法然上人・十二箇条問答——

私たちは、いつの時でも知識を自慢する。博学を誇りたがる。しかし、いくら智者ぶったところで大した違いはない。一階から二階に上って太陽に近づいたと、ひとりである。

人間がどのように修行しようとも、学問をしても、戒律をまもっても、仏さまに近づくことは容易でない。それを心のどん底から、「本当に私は愚鈍の身なのだ」と信知されたのが法然上人なのです。

このように気づかされて称える、お念仏が、本当のお念仏なのです。

総本山 永観堂 禅林寺



御影堂

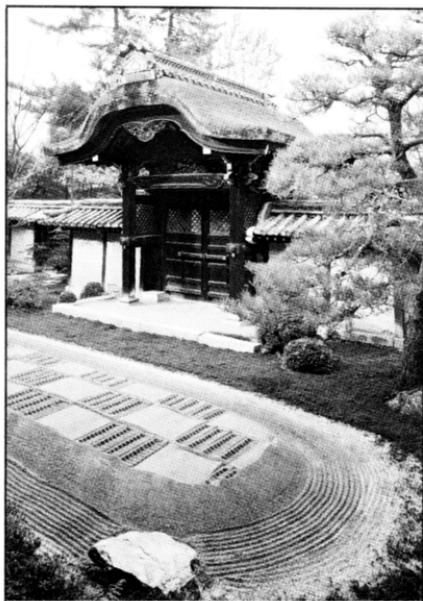
少欲知足にして、染、患、癡なし。

——無量寿經——

昔、マツラ国に一人の王さまがいた。臨終に際して、二人の王子を呼んで、

「財産はすべて二分せよ。」

と遺言した。王子兄弟は父王の死後、その遺言どおり財産を二分したが、そうしてみると、なんだか不公平な気がしてならない。兄は弟が多いと思ひ、弟は兄の方が多いい争った。そこへ一人の愚かな老人が現われて、「これこれ争うものではない。私が二分する方法を教えてあげよう。そこにあるもの全部、お金も着物も皿も、なんでも二つに分けて、二等分するがよからう。」と言った。二人の王子は老人の言葉に賛成して、すべて財産を二つに破り裂いたと言う。人々のお笑いぐさとなったことは、もちろんである。(『百喻經』)



方丈前庭と唐門

みようきょうと
明鏡を執りて、自ら
みすか

めんぞう
面像を見るがごとく

なるを得べし

観無量寿經

三ツ目小僧になれ!

決して化け物のことではない。一つの目しか持たなかったなら、物が見えるけれども遠近感がわからない。両眼が備わって初めて遠い近いもわかる。

それに、もう一つの目を私たちは備えない。——そう、第三の目だ!

インドの北部地方からチベット地方にかけて、聖者は額に第三の目を持つ“といわれている。しかし、私たちは愚かな存在なので、つつい自己中心的な考え方でものを見てしまう。第三の目というのは、超能力の目でも何でもない。自己の内部をふり返ってみる“心の目”なのである。

仏さまに手を合わすとき、それを鏡として、心の眼が一段と大きく輝いてくるのである。



大殿の廊下より釈迦堂を眺む

あるときには 世間の
無常なることを思い、
この世のいくほどなき
ことを知れ

——法然上人・十二箇条問答——

お寺の廊下には、行事の開始を知らせる木板もくははんが掛かってあり、そこには

生死事大なり 光陰おしむべし

無常迅速にして 時は人を待たず

と書いてあるのを見うけます。

うかうかしていると、一日一日がむなしく過ぎ去ってしまうから、心をひきしめて悔いのない人生を歩むように、という戒しめです。行事のたびごとにこの木板を鳴らすことによって、人にも己れにもこの戒めを心の警鐘としていのです。

無常なる、いくほどもない、たった一度の人生を、むなしく過あごしてしまふのか、それとも生き生きと充実した人生を送るのか。

どうせ同じ一生をすごすのなら、自分だけにしかできないのを見つけ、それをやりとげねば死ぬに死ねないという使命感をもつことが大切です。時は人を待ってくれないのですから。

総本山 永観堂 禅林寺



臥 竜 廊

人、世間の愛欲の中に在りて
ひとり生まれ、ひとり死し
ひとり去り、ひとり来る

——無量寿經——

最愛の妻を亡くした老人がいる。共に暮らしたすべての人たちに別かれをいい、静かにおだやかに逝った妻。

火葬場で最後の別かれを告げるとき、老人は

「永い間ありがとう、……」

声にならない啜^{つぶ}やきが、頬を伝う涙にあふれていた。

いつか独りで死ぬのだけれど、悔いなく生き、あとに残った人たちから「ありがとう」と送られ、愛する人たちに思い出をたくさんく残して生きられたら、どんなにかすばらしいだろう。

父や母から、そして仏さまからたまわったこの私の生命^{いのち}だもの、日々そまつにしてなるものか。

総本山 永観堂 禅林寺



日除釈迦如来像

自身はこれ

ほんのうぐそく

煩惱具足せる凡夫也と宣へり

ほんぶなり

のたま

—— 一紙小消息 ——

ある服飾デザイナーが言った。

「人間だけだ。生き物の中で洋服で着飾り、すてきな靴をはき、お化粧ができるのは……もっと自己を主張しましょうよ！」

結構なことだ。別に異論はない。しかし、もっともっと大切なことを忘れてはいないか！シルクの服を身にまとい、お寺の白壁のように顔をぬり、バラのような口もとにする前に、まず心の中を美しくしなければならぬ。

外からみる美しさは、心の内からにじみ出てくるものだ。

せつ角、受けがたき人界に生を受けた私たち、心のお化粧をせずにお浄土へ帰っていくわけにはまいりません。

仏さまに手を合わすことによって、少しでも美しい心に育てあげたいものです。



阿弥陀二十五菩薩内の一菩薩

あみだぶつ
阿弥陀仏の行は、
しゅじょうねん
衆生の念・不念に
よるべき行にあらざ
ぎょう

—安心決定鈔—

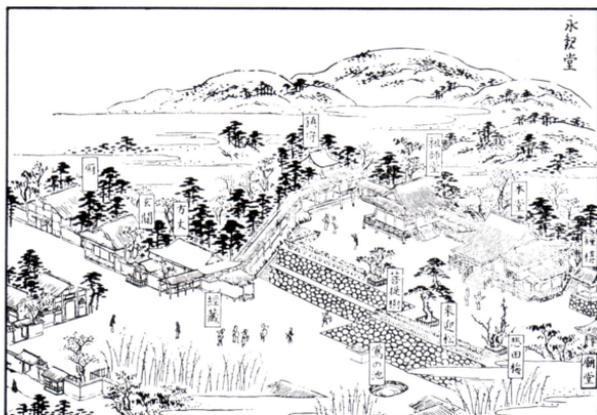
うっとりとして子を見やる母。その両手に抱かれて、無心そのもので母を見返す子——このようなほほ笑ましい光景は、だれもがよく目にすることですね。

母というのは、子をもって初めて母となるわけですが、母となるための心得は、それ以前から色々とな身につけます。「私が母となった暁には、このようにしよう。また生まれてくる子のためには

ああもしたい。……等々」

しかしそれらはどれ一つをとっても、生まれてくる子に要求されてするといった類のものでは決してありません。母親の方ですべて用意するものばかりです。そこに子の「安住」があるのですね。

阿弥陀さまが私たちのことを思って下さるのも、丁度それと同じことなのです。



禅林寺全景図(都名所図会)

安永年間 <1772~1780>

もろもろの庶類しよるいのために、不請ふしよの友となり、
 群生ぐんじょうを荷負かぶして、これをおのが重担じゅうたんとなす。

(無量壽經)

ひとつの因縁で、人は窮地に立つことがある。動けば動くほど深みに陥り、誠意を持って対処してもその真意を理解してもらえなかったり……。自暴自棄になってまわりの人々を苦しめ、ジレンマに自分自身もわからなくなってしまう。こんな経験を大なり小なりお持ちだと思ふ。

そんなときに善友や良縁、なにげない人の言葉や良書に出会ったりすることがある。そして、じっと視つめていられる伴侶に気付く……。『あ、独りではなかったんだ。』自分ひとりて苦しみ、歩んでいたと思っていた高慢な自負心が、知らず知らず選ばしめられた真実の道を歩んでいる。真摯しんしんな求導くどうは自分の願望を満たしてゆくことではなく、仏の大きいなる「はからい」を聴き、気づかされてゆく生活である。



新装なった「画仙堂」

彼の国かくにに到りいた已おわつて六神通ろくじんつうを得えて、
この十法界じっぽうかいに入かえつて苦くの衆生しゅじょうを救くしやう摂す

—— 善導大師 ——

人は亡くなるとどうなるか、とよく尋ねられますが、もし人が朽ちて滅びてしまっても、実はちゃんと私共の心の中に

帰って来て、私自身を助けて下さっているのです。逆に私が滅びても次の人の心の中にちゃんと生き続ける、というのです。今、一枚の木の葉が太陽にむかって精一杯広がっている姿を思い起こして戴きたい。葉というものは太陽の光と炭酸ガスなどで澱粉という栄養を作っています。この澱粉はそれぞれの葉の生産物であるにもかかわらず、葉脈を通じ、枝を通じて、常に樹木全体のために使われています。たとえその葉が日陰であらうとも、たとえその葉が早く朽ちようとも、一枚として、樹木を一張り大きくするのに役立たないものはありません。

私共、今からでも遅くはありません。生かされていることに感謝をし、今の今を精一杯まじめに生きていくならばたとえ朽ちても次代に栄養を残すこととなります。

そう信じて、明るく楽しく、毎日を精一杯生きて行こうじやありませんか。

総本山 永観堂 禅林寺



画仙堂天井画『天龍之凶』

今生^{こんじょう}むなしく尽きなん 此時すなはち往生の時なり。余命しばらくも

とどまらば 何れの日か出離の日にあらざらん。

——西山上人「女院御書」——

平均寿命が益々延び、老令化社会が深刻化している。結核、ガン、心臓病について今後は老人性痴呆症が一番大きな問題となってくるという。そのような中で、先日 有料老人ホームの入居説明会開催という新聞広告が目についた。

.....
先年、定年をむかえた人がこう言った。

「はやいもので、私の人生は終わった。これからは十分に余生をたのしもう。」

人生に余りがありますか？余りなどあったまりますか！
いのちつき終るまで学び上げなくてはならぬことがたくさんあります。

今生の命のなくなったときが往生のとき。命のある限り一日一日が、仏の因縁を知りて仏の功徳を念ずる。真のお念仏を称える出離の日なのであります。

総本山 永観堂 禅林寺